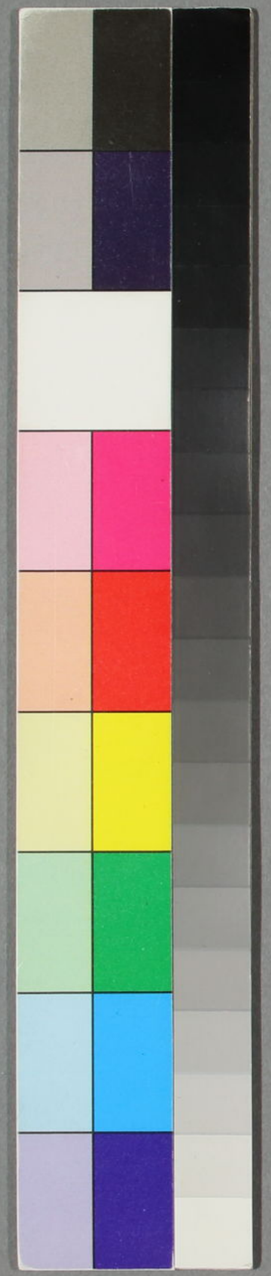


吉田兼好句集
全
へ 5
1824

元禄二己巳歳

元日に田ゐ雪ふる日こそ忘しなれ
春雨や蓮をのこす茅舎道
氏筋よ雨ふれて茅舎の画讃
葦さゝ雨ふるさゝ屋や破れ衣
塔山掘石そ
陽炎ゆ見に有に角ゆるれ
酒のこゝろ人の強り
月花もさらくて酒のこゝろかな

自在文庫

茅菴に梶楫あり門人なる真角
嵐雪あるを
去れども梶と楫や茅の縁
山家
鶯の巣小あるじ此邸の楫邸
留別
鮎なるの白魚送るるれる雁
仮る旅人なる漕り松風の茅堂
ようつ歌
茅のもも仮の世は代を離れ山家
あるとふ別を船を上れハ前途
二千里乃男ハ物よふさう事

行春や鳥啼魚の目は泪
室八嶋
糸遊にしき引つまるはるの風
日光山
おもたき雲ハ茅葺の日光
郭公ふるこえ此湖乃うち
暫時は瀧にこもるや夏乃月
雨降れハこの瀧寿角と笑ひ
蔦葉をやたうく此宿乃子規
百年原の人を枝折の夜明
後験光明寺を行者堂を拝む

夏山を見捨て首途する
雲山寺の奥に佛頂和尚の山居の
跡あり石上に小庵岩窟よもまひ
本堂も菴もやはらす夏草之
那須の温泉大明神の相殿
八幡宮を移し奉て両神一方に
鎮座まします
湯を引かせ玉ひしもたれし 岩清水
殺生石をみる毒気の毒なれ
ひとひ惜紫の毒ひ出ぬ
色のたくひなきさまなり

石の姿や夏艸 新しく蕨 暑し
秋鶏主人の住景より
山も庭もうつくしき 入梅や生臭
鮎代や馬に送る叶口付
れのこし短冊にさくらふやけし
つゆを雫作るかなしさ
野を横ふ馬 蕨むけよ 郭公
清水流るる柳 蕨生る里に
あるて田植時より鳴る叶所の那
ヲ郭巨の子この柳をもやをとろく
の移り剪られ移ふをいつく移やと

男ひしをりふしこの板ばしをこそ立てはべれ

田一枚植て立去る　板うち

奥州今弥白河を初

早苗も我色黒き日数哉

西ハ東ハ市川子苗も風の吉

関ちかき宿を水鶏に問ふ戸ざしかな

須賀川の駅に等窮といふ者の家に

尋ね侘て白川の関いかこえつる

やゝ向ふ中

風流のさしもぐさやたく弛田植うた

此所方俗に大きなる栗の本陰に

世の人我を見てかろしといふ僧おもふ可伸坐

初志業成ぬ所や都の栗

たのふ弥里程なれば

早苗とる手もとやむしろ引

佐藤庄司が旧跡の寺に義経の

太刀弁慶が笈を収て什宝とす

笈も太刀も五月にかざれ端午の節句

ハ笈ハ笈ハの通称也と

五月雨に色いろあらはれて

佛たちハ蓮の露を結ぶ

世の人我を見てかろしといふ僧おもふ可伸坐

初志業成ぬ所や都の栗

たのふ弥里程なれば

早苗とる手もとやむしろ引

佐藤庄司が旧跡の寺に義経の

太刀弁慶が笈を収て什宝とす

笈も太刀も五月にかざれ端午の節句

ハ笈ハ笈ハの通称也と

五月雨に色いろあらはれて

佛たちハ蓮の露を結ぶ

笠潟をいつこと月乃ぬう　道

武隈の松ハ根ハ土踏まう二本ハ

わかれて昔ハ見しかハ今ハ

拳白といふものゝ武隈ハ松乃花中を

通ハ人ハ踏ハ

桜ハ松を二本を三月こし

仙蓬に入るあ空見ぬと見ハ畫工

素光ハ白云ハ武者ハ弾乃深ハ

笠鞋を銭を

あ中ハ笠ハ笠ハ笠鞋乃ハ

松島

塩しほやをにとゝきす夏の海

高館

夏草や　兵どもが　夢の跡

光堂を七寶荘厳ハ世ハ滅ハ

月日ハ中ハ金色ハ柱ハ雪ハ降ハ

五月雨乃降のこしてや　光堂

三日風雨ハ山中を遠望を

象潟　馬ハ　厳を踏　松ハ

尾花沢清風亭

涼しさを我ハ宿ハ借ハ

遠山とこゝやハ下ハ鳴ひ文の聲

おもかるきを俳諧とし重頼の影乃花

立石寺

閑さや岩に染入蝉　芭蕉

七月雨を過てあつ先て早し家上川

風の香も南へ近しもがみ川

新庄風流亭興行

水の奥ゆ雲ふかし物うら松

羽黒山へ登る會覚阿闍梨の

懇懇の情こまやかなるし重南義

別院へ舎して

有難や雪をかうむる南谷

きくしさやかの三日月北羽黒山

法ら水の湯屋へ入て月を見る

雲のうへいろ川前れて月光山

羽黒山へ登りて鶴岡の陽に定行亭を

発つるや山を出羽の神ゆきの

酒田淵庵ふ玉乃許を

あつき山也吹浦うけ宇多　きくこ

暑き日を海へ入れさう家上川

花と実を一度に瓜ばさう乗

不卜一周忘琴風勧進

郭公啼　音や・時ゆき　硯箱

雲丸けきをしさや
岡へ入さるとの方

雪丸けに出立る事

影沼や雨に西施の面ふの花
汐越や鶴さ寄ぬれて海すゞし
小舟こぎ　松さくしや海士の釣
象潟蜑藻とよまれし桜の老木
西行法師乃記念をのこす
夕なれや桜よりむ波の花
越後の国出雲崎と申所
能登の国へ海上十八里と申
神秋のうそ霧あく長流に
波を富うつされハ星の上乃
ゆふ見わたさる

雪丸けに薬園と申

荒海や佐渡よこたふ天の河
文月や六日も常の夜ハ星
高田藩哮細川事菴ゟ
薬　槽にいつれ花を挿松
花引ゟ花ゟ　藤ゟ一間隔て
美き女の事二人ゟ　越後
男子事　交ゟ物語ゟ
越後の国新潟と申所乃遊女
伊勢参宮ゟ　中国ゟ
送りてゟ　花の元
ゟ　ゟ　ゟ　ゟ

一家は遊女も稼ぎ萩とぞ

加賀の国に入

ませの事や多大名の儀法

一第にいふ所の道にまぎれる名の

かの〳〵聞へしに去年の冬世

ちうちうにその兄追善に借ぎる

墳も勤け家産を秋の風

こうの水を思ふ事

無仮のゆこうやいりのむまう

少の菴まいさまれく

秋ちくしに毎年じけや時行茶子

流葉と称是者もの

指然ちうさまてうの秋のうき

秋もやこいりのれを流石は目に

見へぬ風の音つれもいちにしく

称是程ますさう多続も

あうう〳〵を日を経面も秋の風

小松とい小ふ所

ちうちうしまき名や小松ふく萩ちき

観水亭雨中の會

ぬ徒〳〵行人も花のしや雨の萩

太田の神社に実盗う甲錦の

切ちを見事

宮丸けにたり〳〵きもの

じさんや甲斐下乃きり[illegible]

那谷寺と那智谷組の二字を

ひろ[illegible]ひろ奇石さま[illegible]古松

植ち[illegible]て絶勝の土地なり

石山の石ちり白し　あさ[illegible]風

山中乃温泉

山中や菊を折[illegible]ぬ湯の[illegible]

桃夫[illegible]名をつけく

桃の木乃その紫ちる[illegible]秋の風

悼遠流夫看法印

[illegible]法の月

曽良よりとゝ[illegible]

今日ちりやすき書付消ん笠の露

金昌寺に[illegible]の[illegible]に

乃ふを[illegible]も神[illegible]て遊[illegible]

杉[illegible]し庭[illegible]のちり[illegible]

庭掃て出ばや寺に苔ゆふき

湖水の橋をわ[illegible]

清水[illegible]橋[illegible]て一[illegible]

あさむつの[illegible]書る所[illegible]

あさむつや月[illegible]の橋乃明[illegible]

月のこの雨にわ樓もちり[illegible]

月見せよ玉江乃芦をうち靡く
秋の山　義仲乃寺覚の山の月　凄し
金澤の北枝といふ人見送り
申侍りて
書て扇引きさく　余波う曳
湯尾峠
月よ為に色こそてやいもの神
吉崎詣て
門よりも入て蘆鉾小菊の露
何ぞ涙を稲つまを待さうらん

源氏の第十五篇鉾の
露の秋と考

寺院の門神は夜案す往昔遊行
二世の上人ふつふつ土石を荷ひ泥
濘をはらひて参詣せるの形なるし
古例今よりもなほ神前に志砂を
敷の除よ是を遊行砂と唱へ
月清し遊行のもてる砂の上
名月や北出る日和さそ発るまき
鐘う湾て
月いつこ鐘つき志ひめ海の底
種の濱よ遊ふ
舞しさや須戸よりも原源寺秋

沼の間や小貝にすむる蛙哉

悠然子墅

籠居亭本弦寅の夏拾ちや

木因亭

うられ家や月を菊とに田之及

如行亭

痩るうつかりあき葉弦つるる

新嶺亭

伊吹とふ花もよそに見なれ

書うられ孤山徳あり

うるはしに月もうるはしし伊吹山

拾の物うきもいまこそやまるに成月

六日になれハ伊勢の迂宮稀とと

蛤乃助ときよりれ行　秋楚

内宮さいとはきまりてあ文弦

迂宮楚を待うる

たうゝきたにうれ押合ハ沙　迂宮

宇治弦中村とい山形そ

秋風や行野弦墓原杉きこ

又云う宮よそ先うれ行うそ

弦書男の心にひとしくうる弦

中のにうくうれそ日

数を切て席[illegible]
つゆも今夏にや出[illegible]

[illegible]月[illegible]て[illegible]

月[illegible]より明智の妻[illegible]
知足の[illegible]重[illegible]の彩[illegible]
よき家や雀[illegible]うふ背戸の栗
茅の[illegible]く捨へ[illegible]

遊女畫賛

枝[illegible]
晴嵐や[illegible]
草[illegible]
[illegible]

[illegible]先を屋[illegible]
山を西[illegible]

[illegible]橋を[illegible]

いつく時雨笠を[illegible]

茅庵

人[illegible]
ある庵[illegible]
[illegible]庭や月もいや[illegible]
山中[illegible]
初雪に[illegible]の皮乃[illegible]
いさ[illegible]
重[illegible]
[illegible]

[illegible]

信西老湖水の磯を流れ
田螺芦間乃蟹ちさを恐れ
牛も馬も踏まるるもられ
難波津や田螺の踏まるる蘆の籠
志をしうられ乗る人をるるさえて
先祖へ梅を乞んの乞こを
自畫自讃
いうめしく紀音や蟹に桂木蓋
長嘯の墓も先ら鉢巻
膳所の庵人〻訪るる
蟹せよ。弼代ひ水魚煮て出さん

伊よこの時之志市より行　うら志

元禄三年歳

都ちうき所より年をうりて
薦を着く雑人いまを花の　春
神路山を出るうて西行法師を
ちらひ増賀の信を出しむ
伊の木乃花をしらを見れ
躾ちちゆきはら規のあしこの事
二見の圖を稀に行て

うこの梅ゆうしなれ花浦の色
蓮女の家をそ
愛簾ゆかしなれ奥なつかし北の梅
跡茅亭
雪庵のぬるもわらん雨ぬれ花
うらぶれ蓮ぬれ蓮しる桔梗の事
陽春や朱明の原乃蔦ふり色
当園花植ぬれ荘主ぬれ亦
長乃八重桜の枠ゆかれ
いひ伝へ伝へれい
一里ゆ長乃花ゆ子孫うや

州舎しや夏の影発しに桜う
稚芋や花ぬれさこうを貴あり
藤ゆ棚ゆ木ふるまて
土手の松花や木ぬこうま飯伝
木角奥行
畠うり音やあらし乃桜あき
ゆ雀帰中の松子や雄子ぬ影
蛇ふふゆ少ゆ恐ろしゆしの夏
木のもとゆ汁も鮓もさ乃うれ
出迎圖子宮丸をいさむ桔梗
花ゆ人ゆ

当帰庵あるじ憤の吉之丸氏
爰の景色を彩りとして
瀬田乃蛍見
かゝ[illegible]ん や船 氏藤 [illegible] 覚束ル
石山のたく[illegible]
捨る菴あり 幻住庵と[illegible]清陰翠
幽玄佳境いと目出ク[illegible]
[illegible]れハ月のもし先翁入て
先ゝこの山推敲あり 夏木立
幻住庵と龍れるころ
夕も弱ふも つゆすゝ[illegible]ル花

[illegible]氏白筋出ス
四月廿七日とあり

昨道や葵こゝろ[illegible]く五月雨
勝所へ行人な
御乃ぶつゝ見て来よ 瀬田のにく
長者迅速
やうそ死ぬ[illegible]しき[illegible]蝉 [illegible]
大津 [illegible] 長宅
敲子花のこし[illegible]花 [illegible]間
合歓の木 [illegible]ル
木曽塚中 菴墓所近し
竈ぶつ[illegible]ふも 焼場 [illegible]
木曽塚の [illegible] 敲

[illegible]

[illegible]

桐[illegible]に鶏[illegible]

殘の[illegible]や稲[illegible]

[illegible]田[illegible]

病雁乃夜[illegible]

[illegible]の[illegible]小[illegible]老[illegible]

[illegible]門[illegible]自の像[illegible]

[illegible]の方に[illegible]

[illegible]これ[illegible]

六十[illegible]

[illegible]夢の[illegible]

是に[illegible]

こちら[illegible]我[illegible]秋[illegible]

田里[illegible]道[illegible]

[illegible]雨[illegible]や田の[illegible]株[illegible]

[illegible]音[illegible]時[illegible]

[illegible]や頻[illegible]人の[illegible]

大津[illegible]

[illegible]人の山[illegible]本の[illegible]

洛[illegible]

[illegible]日[illegible]京[illegible]無行

[illegible]

い[illegible]人よ[illegible]
[illegible]
[illegible]つゝね[illegible]のうゝろや道　巨　[illegible]

旅行

きつゝ雪や[illegible]ゝ僧[illegible]茂乃色
[illegible]き世をたのひ[illegible]
[illegible]の[illegible]てし子[illegible]ゝ[illegible]
果の朔日[illegible]
[illegible]
[illegible]
行脚の[illegible]器一[illegible]

[illegible]通り送り[illegible]
これや世[illegible]煙[illegible]
[illegible]の[illegible]乃雑人[illegible]
[illegible]の[illegible]志賀の里[illegible]
と[illegible]
[illegible]老尼の[illegible]
[illegible]

[illegible]乃[illegible]
湖水眺望

比良之上雪[illegible]
[illegible]鮭[illegible]

まく惜大徳寺滑稽丹青
京都を立出て乙州の彩書に
去をまちて
人々家をうハせ我も西わかれ
元禄四未年

湖水の名菴を尋むふ時
二日は閑く題正月晋
大津絵の筆弘そし免を仰佛
乙州江戸へ越く時
梅わの菓まりこの宿乃さらく汁

少文庫に筆のうしめやと有

山里を夢覚遠しう免乃花
卓袋亭月待
月待や梅うちけ行小山畑し
里の子等梅折のこせ牛弘敏
田家よりて二句
麦発しに川向く窓う猫の書
こまうち沈雨や二条乃茄子ゆ
素兵衛旅人を引る
二服よわうれ初りう 庵弘角
珠頂う酒岩屋の記ありて
四方より花吹れ来湖乃うち

結集ふみ等と有

笈小文に同系書を庵の角方一冊北ゆうれ沈と有

春の[illegible]

万年別墅

年〳〵やさめ〳〵をこゝや花のちり〳〵

尾張の人より淡海一樽本當花獨酒

茶一袋送りしを門人にひろむるとて

飲ひ〳〵花ちる中ん二升樽

布施の庵にて

ふぜいさやこのき起されし春雨

山吹や笠よりこぼす花枝の雫

畫讃

屋内ぬるやうぶ焼焙の白ゝ時

雁子ゝ鳴ゝ帰ゝ山ゝ嵐ゝ花ゝ菓

闌ゝ夜ゝ菓ゝを中ゝ入ゝして帰ゝ雁ゝ

琵琶湖水惜春

行春をあふみの人とおしみける

京も京なつかしやゝ　時鳥

ほとゝぎすてもホ竟ゝ鳴ゝる夏の月

[illegible]塚にて

子規大仏殿を[illegible]月　夜

あ[illegible]山ゝ蔭の志ゝ[illegible]や風ゝ[illegible]

小督屋敷にて

うき姿ふし〳〵や[illegible]子ゝ[illegible]人の果

泊船ゝ夏の郭ゝ載

[illegible]ゝ載たり

諸集ゝ夏の夜や[illegible]

[illegible]ゝ[illegible]

諸集ゝ大仏殿とあり

[illegible]ゝ大仏殿ゝ[illegible]

たゞの子や雑言吐乃強のまさこ

或寺にひろ屋て

うき家をさひしうもせよかんこ鳥

為梅舎

柚の花よむつし悲ん軒昭孔間

五月雨や色残屋きく法屋のあと

粽ゆ行をにさもひしと白髪

麦孔穂や海に注す嘴を雀

能るし乃祢姫さし我しきし

西成像鐵肝石心牛人之情

接子子こうほるさゝや梅の蔵

注集むし　とうの子も有

同へけうりもあり　沖船ぞれ　と有

注集麦の穂　と有

小文庫に小さきを　池をうり　と有

能て慶んん接ゝ嘆ほ石の　上

わゝ有　き蚊の小さきも孔を穴

丈山乃像に渇を

風ゝ涼ほ識を袖もつゝ

水寄月き也く庵ゆ孔墨れ

井特氏少接

拾遺に寒むとも有

世の友や湖水ようの海浜のゝ

ゝ夫をあく孔蛍や花のゆき

四條の河原ゝて夕月涼乃

こゝろう有る過て川中に

涼をゝ夜をゝ酒のゝ

遊ぶ女を[illegible]むとて免いのめ[illegible]く
男を[illegible]識るとて[illegible]着をし[illegible]法師
老人をまもりし[illegible]屋のちやの[illegible]
子をいとをは[illegible]のくし[illegible]さそこの[illegible]
都乃[illegible]しきるゝ[illegible]
川風や[illegible]この[illegible]考[illegible]る夕まくら
中間を馬の[illegible]にちなみ[illegible]に
[illegible]を家名と称し[illegible]
じうゝとあら[illegible]扇や[illegible]
蓮の香よ月をこよひまや面の[illegible]
湖仙亭

氏宿を水鶏もしらぬ庵哉
游刀亭湖涼二句
ちゝ浜や風の蓮の葉ゝ[illegible]柳子
湖や蓮をたしむ[illegible]乃瀬
曲巣より迎て田家に題を乞て
飯あふゝ曝さもやゝ夕すゝ美
[illegible]秋や[illegible]敗屋の秋着
盆過ゝ青蔭ゝし虫の彩
胡蝶ゝ[illegible]て秋ぬる菜虫哉
秋風の吹[illegible]し栗[illegible]
住吉銘 人の短をいふことなかれ
[illegible]長をいふすなかれ

[illegible]しあるの風
[illegible]の夢閑き[illegible]暑氣

畫讃

白露もこぼさぬ萩乃うゑ[illegible]
霧雨[illegible]を芙蓉[illegible]を[illegible]

或智識の曰まゝ[illegible]大藏のまゝ
とゝやいと者うゝくすし
いるつまにちゝぬ人の貴さよ

西[illegible]
稲つゝや[illegible]西を[illegible]
西秀尊和會

諸集月の名

月代や[illegible]をたく雪の内
古寺殿月
名月や生にうゝとし[illegible]
於義仲庵
三井寺乃門[illegible]
名月や二ツ[illegible]月
[illegible]友[illegible]乃月の[illegible]
[illegible]月の[illegible]
舟[illegible]浦[illegible]
[illegible]月さし入る[illegible]
いさゝひや[illegible]

屋根にて出でいさよふ月の色
曲彔亭にて題詠を
氣麺の小焼する夜宴この事
稲荷にて先茶飯お畑や迎所
小寺を過る
萩枯麺や野をつゝむ霧生川
むこうしきけちらす畑屋さく お樸取
猪引き猪の小神出ぬさられ
雁の目も今や夢ぬ時鳥
鬼灯き実も落ちもこうも 新茶ぶ
茶の庵ときみたいや見名られ

ども世よこ死りしき物えて有る
比叡き赤山よ住る僧を為く
西行のよ山庵張ひろはよし
山部集よ載られういこる伝長よ
中と書つを紀坊の名川うし氣と
茶の戸乃月やそれきの祢宜坊
九月九日 別二楊を書つさく
茶の戸や日ら氣し夢張庵
足痛のあれや地乃後 の美
因歌よ中書て

輪に変ぜぬ時もなてしし菊の花

大門通をとおるとて

琴箱や古き代官の屋敷

曽田の伊東未改醫時代の亭に

まねかれて茶をたて酒を

のむとて

ながされる地蔵は塩代中々

蕎麦の麓いと芳しかれい

嫌も集る夕飯をまつ菊の麓の

同拍瀬可休亭

祖父と親たる孔子芸庭の梅をうん

蕎秋の家色を

[illegible]

秋風や桐ようこゝの葉ぬけ哀れ

石山より清水参道

格斯孔志の名月の名所なり

格窓長取

九度起てもの月乃七ッ過

月の澤と聞る明照寺に掛の

山を浄しして

[illegible]や清水ちる雨葉

国寺信者奉加の初書の四竹村

蕎麦土石走ると深未之為ちて

[illegible]に蕎麦伝れを

百千[illegible]さし出さる庭の[illegible]
首の葉乃松[illegible]
美濃耕雪[illegible]
[illegible]

[illegible]川亭

折[illegible]
葉の後大根[illegible]
[illegible]川亭

[illegible]を探る梅に[illegible]
勢田梅人亭塵[illegible]乃間を
[illegible]

治郎探梅と題書
あり笈中文に花[illegible]

水仙や白き障子[illegible]つ
[illegible]白[illegible]
三人や桃先桃後と[illegible]
あるて

[illegible]仙花
[illegible]
同彩塚の[illegible]中黄泥[illegible]
[illegible]
いつれの[illegible]代[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

梅樹早咲[illegible]

陸奥守にいとま出して
と有諸集に書かはる

鳳来寺へ籠して

夜着一ツ祈り出しゝ旅寝哉

あつかりしに岩吹とかす松間の風

嶋田の駅塚本か家にいたりて

宿かりて名をなのらする時雨哉

馬かたはしらし時雨の大井川

名月たえし武江より帰

都出て神も旅寝の日数哉

三秋を経て草庵に帰れは旧友

門人日々にむかしを尋ていふ

まつ命ありてこそえ侍る

泊船に日ころまつる翁

ともかくもならでや雪の枯尾花

常にくき烏も雪の朝哉

重ひまて讃能書候着せてまゐりし

小町画讃

たふときや雪ふらぬ日も蓑と笠

仙化か父の追善

袖の色よこれて寒しこいねすみ

旅行

煤掃は杉の木間の嵐かな

素堂亭忘年

節季候を雀のわらふ出立哉

陸奥くさぐさの旅

奥鳥[illegible]

元禄五申年

[illegible]や猿に着せる猿蓑に西
[illegible]蕉[illegible]ふる世賣うりわら葉うり申
[illegible]もみくしきさの月也梅
[illegible]や極楽しる蕨の前
[illegible]や[illegible]に囊[illegible]極楽[illegible]
[illegible]ぬ[illegible]の梅柳
猫の恋[illegible]時園の脱月

題[illegible]
本曽[illegible]情雪や生ぬく去の[illegible]
松[illegible]や蕨に啖あそし[illegible]蕨の砂

蜆子圖讃

白魚や黒き目をあく法の網
起よ〳〵わら友なしなる小蝶

西行上人像賛

[illegible]て[illegible]み[illegible]ふ[illegible]と思へ
雪の俤日[illegible]ふくこそあれ花の陰
日[illegible]れ[illegible]
[illegible]帝[illegible]天のあ[illegible]

鎌倉を出て出る　神奈川

端集、素堂らと

五月雨や蛙ふらつく　素堂

ゆゆ形や　蛙て新出を窓の穴

ふる雨等よ　芭蕉

青の測明をうつむ

忘形に老蛙ひこうやをこ法師

れ五月や朝を　あれる隠しら

素堂の如七十年を生しの秋

七月七日に出と始まる夢集七

種をすて題を

七株死萩のなかや星祭秋

芭蕉の花のようなれ

書くても有へきり秋を庵こうし

この寺を庵一を以芭蕉の事

三日月よ地を眺うう夢妻の花

名月や門はさしこむ湖のしら

柳を松風柳風を割り仮庵を

夢を覚水の過去を切ぬる秋

明月のうちわのようなる芭蕉之女

を植う

芭蕉葉を柳る盤に庵秋月

松茸やこの寺を社を書の所

[illegible]川草や[illegible]日影へぬ秋の霧
沙秋乃[illegible]もしや書[illegible]掛
[illegible]ふもこの足人も年[illegible]初時雨
[illegible]鯛の歯ちきも[illegible]し魚[illegible]棚

文梁亭口切の日

口切や[illegible]庭[illegible]つこし紀
[illegible]ひしきや[illegible]皮[illegible]ゆく[illegible]の霜

[illegible]川大橋[illegible]
初雪や掛こ[illegible]橋の[illegible]

同橋[illegible]せし時

[illegible]ひて[illegible]橋[illegible]霜

[illegible]

折[illegible]花入探れ[illegible]
雪[illegible]梁[illegible]
月花の[illegible]針[illegible]
葱[illegible]
[illegible]
世[illegible]
蛤[illegible]

元禄六百年

人も見ぬ春や鏡乃うらの梅

[illegible]くるきくに[illegible]すかと
云[illegible]
[illegible]のさし嬉もすこし梅の花
二月[illegible]日[illegible]是橋う利髮入医
門を賀[illegible]
初しもに孤の[illegible]し[illegible]
肅山乃[illegible]
琴の響ふ
[illegible]たとろく琴[illegible]塵
僧吉吟御別
鶴の毛乃ふ[illegible]き[illegible]や花の雲

[illegible]
西行乃庵もあらん[illegible]の庭
森川許六[illegible]
推の花乃心も似よ本[illegible]
[illegible]き人[illegible]橋[illegible]本[illegible]の蝿
[illegible]
[illegible]月雨に[illegible]の[illegible]菓を[illegible]行人
川中[illegible]根本[illegible]
[illegible]上の[illegible]物
文月[illegible]の[illegible]
沼銀河[illegible]をひきして鳥鵲も

梅杭をたのみ一条橋を打過き
二里も屋形をうしろへし小町の
歌を題とし給へ
高野より是も拾ひや岩瀬を
玉関の説あり
葛や盃を鎖松ゐを門の垣
勢ゐやは是もまことかの友なるべ
を来りとり行勢紀行を
送りなる奥よ書付給
西東あいれさ因し秋の風
老の名乃也もちゝて四十雀

波船をうき雲の音

板敷寒ちる梶の葉や紙あり
畫讃
鶏頭や雁来る時枝あり
浦川の夜雨なれ松をよ歌
舟さし寄こゝ川下や月乃友
小名木澤乃桐葉興行
秋よをふて切ちや古宋を小松川
いさよひをかうに雁のもし免ず
風蘭を時
あき風千切て出し紀寒の杖

同墓に詣て
又しやうぶ七日の墓の音ぞ淋
東順老人の湖上に生れて東
壁に跡をとゞめ
八月乃あゝ古机の四隅に
然水亭にて
新書や菓の香ぞ立こめる夏窗に
八町堀にて
き久ぞ花咲や屋乃石の間
花蘆にて
一家もこゝに菓の秋ぞ淋

金陽の妻やもの淋しき乃ぞ
備作にて
発句にも中ごろ菊を開時節を
陽にて
妻恋しき乃ぞ屋金陽の
秋菓を詠して
菓の香や庭にきれる履ぞ庭
鶴つるに小坊主のゝ大根引
時雨ぞ屋敷あれ
こゝ菓や杉糠のゝ水に白ぞ
曲水橋鍛冶

埋火や壁をさを容乃影怪物
鬱につくゝ寄ぬくし暗の足
宮原子拾数を茅根を喫す
武士の大根をうき嘲この角
雑炊は懸懸きく野霧うれ
をこれの磯よりを弱尺をさこう小
初雪や水仙ゆ茶乃赤もまま
外の讃
赤ゝゝてを雪ま門外ゆし番
芋焼や孫掃の田井乃初氷
瓶破ゝ夜ゆ歩の蕗花ゝを

ゝ掃を己り棚つる大工ゆ鉄
者明も三十日にちゝし解の者
分別の底をゝきりゝ空しのれ

元禄七戌年

蓮葉は聞をや行祭ゆ初物猿
一ゝ鉢に一度つ南ゝゆ茶小
梅ゝよめつと日ゆ出る山泉れ
春雨や箕吹うを川柳
はれ物に柳のさゝ影ゝを人の角

小文庫ゝさゝる柳ゝ者
を来拠文を許宮考
筆もさゝゝ柳ゝをゝ

八九間空て雨津屋きき可然
傘可押多見るに　柳こう郎
書物の泥よもるに　御子うか
夏雨や蛙鳴　菓つふ屋の漏
新よ洩ぬ蛙自も出よ　神楽
句宮への文よ
うう雨ぬし　浮世北北乃　山丸屋
玄庵子の源川　弦掬金をふ
花見ときさきを　舟遠し　柳原
布袋弦畫潜
物ぬし　や袋の中乃　月と花

掬を花と勝府よせぬを笠子
祈ぬ夏の名弦心よ
花よ夜ぬられも者ふ嵐の菓
上野ゝ花見よまり踏に入く
幕うちさいきり音小うう野
さよしゝ部信傍の松陰を
四ツ五器の揃ふぬ花見ふ水
灌佛や皷よ合る新陳弦者
ホこうれて茶摘もきくや郭公
鳥城貴の彦中きゝふし　叶雨
う弦花やふ見柳の夜こし

京都ゝ弦八
江戸ゝ弦ゝ

常陽翁や嚴を小庵の外生成
繪梅蹄彩書自画讃
をうるの爲や牡丹孔雀の
四度もきびしく法師川の庵を立
出るとて
うゝまひまや外の子嚴よ老を時
五月十日武府を出て所々に
川崎者人々送て来る錢五の
句をいふ
麦の穂を毋ようつむ花うゝ
五月三十日北富士の里に出るに

浴船ちらつくと有

日よりの所時やさゝ文五月富士
駿河路や花橘も茶の花よりひ
道芝のつゆをふみわけて
世をうしとあふちや雨の花
大井川水出て藤田塚に氏ゝ
もとにとまりて二句
五月雨の雲吹飛せ大井川
菅笠ぬぎ書ちらす茄子汁
夏の月清池うつす布団ゝ

詩箋に布団やと有

尾張に着交に翁を
世を捨て代りく小田乃一行庵を

[illegible]川うせもらう佐屋まで道
送りしまするに富士山田氏の亭
うまもの
水鶏もとくとく人ばいへもや佐屋湾
地水閑居や思ひ立るか
[illegible]園に見るる佐屋八
美濃路をうき書由のもと文政
音信年
賀歌に登侵せうれ床の山
花田氏より遊
案内し馬の鼻りや田植樹

[illegible]八月九日
[illegible]

[illegible]八月十八日
[illegible]

雪芝の庭に松を植[illegible]て
深しさや直よ世松の枝のうち
[illegible]
[illegible]て深し瓜泥
[illegible]
小倉山常寂寺
松樹を[illegible]や鳥[illegible]る音
六月や[illegible]
世明寺
[illegible]山
清瀧や波に[illegible]の水
ちるこむ青松葉

夕影に于瓢む竹の遊り
元道に蔓して
われと似る二ツにわれし葉瓢
人くつゑひて瓢の名所数多
ひ出る中に
うまれ皮むく所や蓮蔓 曙
大道の城を日光法代系勅使
路ふに庵従を園田伊藤送る
延の露 待ようけし茂こう 鈍
曲馬亭
夏秋夜や為れて鳴しひやし物

大津木節亭
秋ちかき山のうゑ や四畳半
茅庵二句
芭蕉しきふうう茅乃花の露
ひやひやと屋を踏ん人を畳寝る
七夕や秋ぞ寄こもる夜ぞ
大津より伊勢参り光の許より消
息聞れ乱れ旧里より盃
舎をいとる
家を乱れ小白髪乃墓参り
尼寿貞の法名を月中かり孫と呼て

活船 大津の歌

陰夏五月三日一家を乱れ白髪の秋やと言ふ水
さし光一家乱れかと

[illegible]

中間を馬の屯に[illegible]骨も[illegible]

笛吹をこの[illegible]所を

画て[illegible]の壁を拭[illegible]とに

生前[illegible]戦るとも[illegible]遊[illegible]

この[illegible]藩を拭としてこそ[illegible]

うつをりてこそ[illegible]の生前を

[illegible]

稲つまや[illegible]の所うきの穂

いる妻や閨[illegible]方行[illegible]位[illegible]筆

藤巻[illegible]庫子の庭乃[illegible]作

[illegible]

[illegible]家も[illegible]新[illegible]

[illegible]

[illegible]を[illegible]

風色や[illegible]植し庵の萩

稲乃庫も[illegible]やきり[illegible]

めにこう[illegible]や[illegible]はしの[illegible]鳥

名月の[illegible]霧や田乃[illegible]

[illegible]れ芳[illegible]月も十六里

行[illegible]の中従[illegible]山[illegible]

蕎麦を[illegible]花てり[illegible]山[illegible]

松茸や[illegible]ぬ木の葉乃へ[illegible]つき

行[illegible]

里[illegible]の[illegible]ぬ家も[illegible]し

行秋や手をひろげたる栗のいが

南都にて

蒙の雲や京にまさる佛達

幾里秋雲や京良を築代の男ぶり

じゝと啼鹿寒也し夜秋廉

閑清にて

菓秋香蛇ぬけうつる色香節白ぬ

生玉逢より日暮てかへりて

菊に出て京にと紙波を重月秋

信香の帝まさるまつ

外賞てふふうつる所月見ぶる

車庸亭二百

秋の秋をうち落しぶる影蔦

れもしろ紀秋の秋樹や亭亟

園女家にて

白菓の日まさるまつ塵ぶし

接樓

牛秋を伊て年暮ぶる鳥

芝松異行

秋明うゝ清水何をまる人を

清水寺の茶屋に遊ひるあ秋

男乃ふうくるに

松風の彩を先うりて秋ぬ
風雨ふる泥足の集り沈諧選
ふる時所思

武道や行人るしに秋のられ
人麿や武道うえ法あき比書
其物亭

秋もうやうつく雨と月の形
曙山亭そ月下に兎を送るを
題と直ふ
月ちむや孤こもの法 次郎供
十月八日福中吟

ふるに秋の付めるる
愛石と書て後まうる
ふるを云
土芳白はの八番秋の
うう行賀をそるく
中ゆ出れしうそ

梅ゝ花を愛をうれ梅を愛を先る
彩墨の出を先ふ早き 付雨ル

後見出を句を号しれす

花未種ふうこうわらくうこうさしれ
人の方へ此て行ふ
ちりしられ初の字をわう 付雨う事
花木亭
蝶の羽乃幾度越る塀の屋ゆ
紫陽花や惟ふ付花 蕉湖英

人々帷子をきらひて

俳諧ときき京ぶり
嘆ぜしとあり

いてやわれらきた布着さる悔の彦
美濃国垂井北宿矩和ろかりしに
多義して
作り本北庭をいさ老るしられ者
句集彩八去年乃二月十三日
分すりしを一周忌の祭文
ふ北方へ中書こしらふ
梅ゝうくはむしり北一字あられを
郭公彦横さらふや水北うく
ひさ彦乃江よ横さらふやふ規

俳諧ときは三月を沾徳
の刺を水の上北方
にさくすり叡と云

吋多ま〻くうま麦のもう尾茶
豊足れを首筋あきかふ乳
玉川北水にた母れを女郎花
撫やまつ北ひ出を駒むく
足る影やまさ庁ふも看月板
秋海棠西瓜の色に咲ふ
ま〻う桑や彩畑北萩乃取ち
言湖の漁火とふ題をうて
箒火にうしこの花北下むせひ
梅咲ま〻ふろこふ多の京色ぶ

俳諧庁蔡とあり

貞徳翁の讃

れさるれ名やもとぬ蓮葉丸形巾
雁さハく雪ぬ雪ぬ田面や雪の雨
よるくを帆柱さむき入江哉
煙かりて埃さく家よるくつも雲
鐘撞ぬ里も何せう麦秋哉
蝦やすさ朝日ヶ岳ゆうきた
月下老梅追悼
水向寺あるくひ路人道の寺
東武うて人くよ寄す
東海の毛もとつのし麻もと
彩彩乃花よ峰由く蚊秋よ迄

木を伐て寺ゆ口見やくふの月
うう臨や地よまきれぬ蕎麦秋寺
蛙柳や一口きくふ稼乃つ
石田拙太丈亭
一しられ傘や降ゆ小石河
夏ふて名丹著きくこ哉
蓮鶏頭きり遠しくり海新講
蚊ふ汁や朝も青のに寄ふ別
うくを打ぬし凄し牛秋寄
拝打の讃
牛樋乃むらし横の梅秋朱哉

鉢子も霜や豆ゝき拾て及し
むさゝぬうちやや薫にのゝく泉の香

文考東行餞別

生ゝ酒推せよ花平茶器一包

寒山自画讃

庭掃て雪をわすれぬきの紅
蝙蝠も出ようき世乃花と鳥

ゐ拂やえぬ恋作るゐまくれ
蘭の伯素朱ぬし大植の橘
庵を訪れるこの藤しろうさと
いひうん茶を家独乃むし平

よかひ
藤の実を就詣よせん花ぶあと
路通ゝ三ちのくに越く時
学校ゝこ生ぶ花及してゐ春よ
本因寺を作瞞日
降ゝ生ゝ作植る日を箕と笠
世水ゝ旅行を送て
見送ゝぶうしろやさひし秋の風

畫讃

鶯 啼やゝぶ春ゝ色老れぬべし
為ゝ後にゝこ屋しゝ色花つゝき

む免頃やちらく蔵ら保京　太祇

　　浅茅ヶ里ら

海苔汁の海際ちらり海芋挽

子よ飽と十人ゑき花ゆるし

多のこゝく水際られしまつたき

神秋や海もき田の一ミちり

蓮池やれらてをゆこ玉まつを

何らふて小京き秋　孔物陰

名月の茅ゑ　しと茅らて　山

五ッ八ツ茅　孔子よ逆ふるろ　式

海ある雨る者ゑゆる茅の画よ

須ニ广の浦孔年ちりゆや第一把

　　越後の新宿

海よ時る雨や京しきうき月　宿

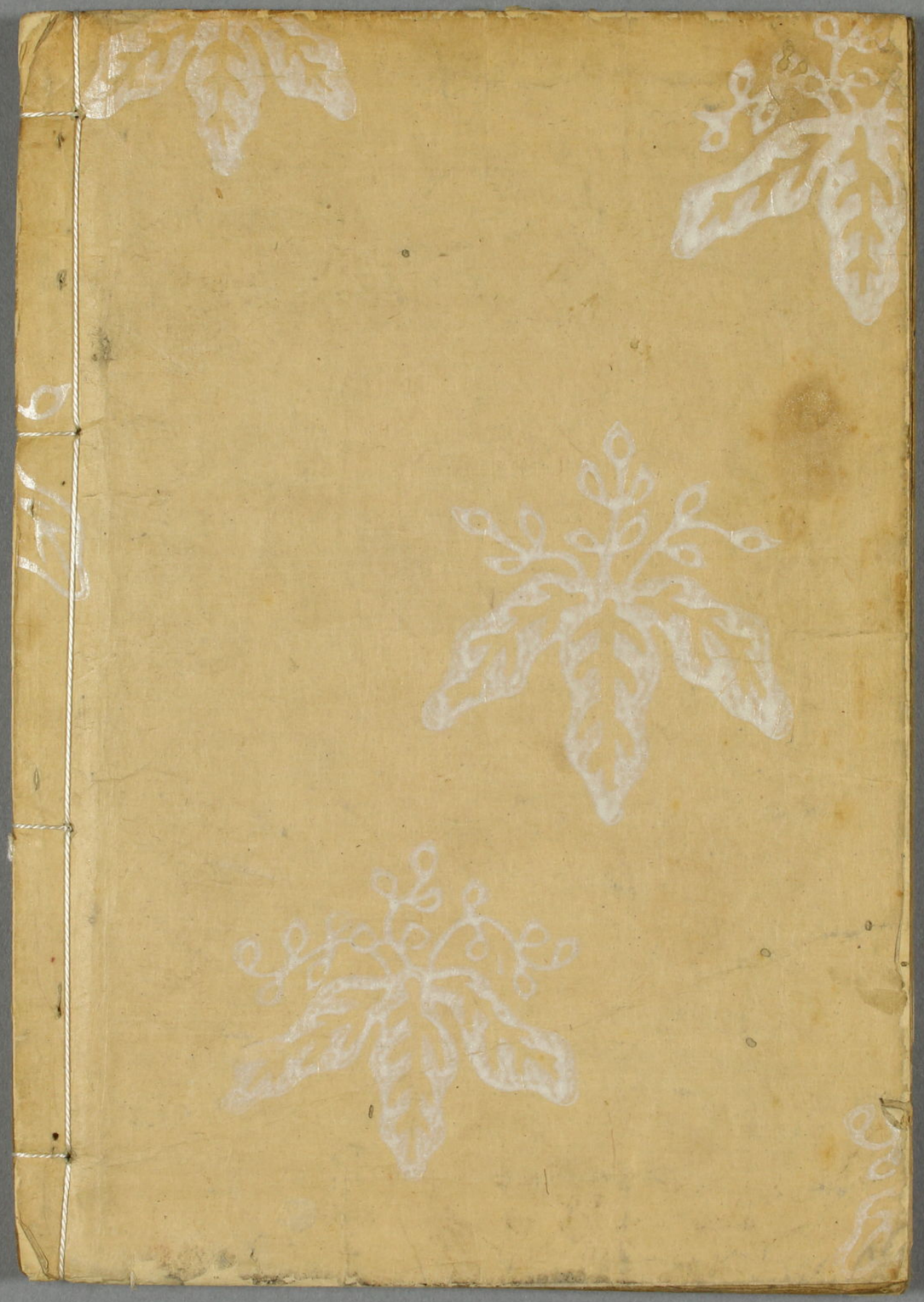
月雨き　孔ふりもむこのき　式

屠孔中に書を得ちゆ者ゑあるゆと

わら時乃この句集を送る孔ちゆられ

悦のあまり筆を執ちつゆ行よあ孔吋者

れく歌道の行脚を思ひ或時は湘南の波
間錫杖をうしなふ涙をそゝぐのあをひさす
句ことの妙弦の月をまねあるうにをこの雪を
障子のうへ俤に面をもて墨つきをれ見へを
とゝに書つけおくりをすると拙き筆のあと
捧よちりをゝて書林井筒屋多代目の莊を開ル
あるあ所歌河をまし歌但陰豊葛川花わとり

佳言楼うして
墨拓謹書

安永二年年七月